

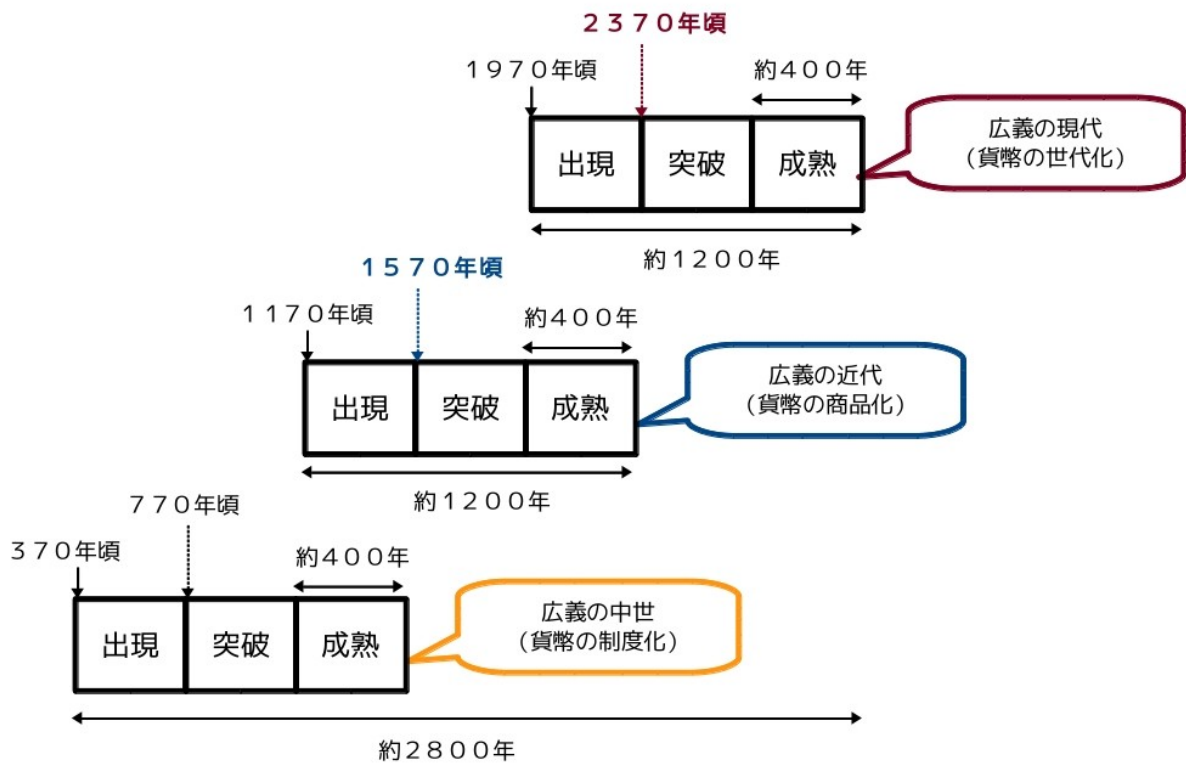
2. レベル4パースペクティヴ

2. 1 古代ペルシャ帝国と古代ギリシャ帝国の終焉

商品が存在しなければ市場は成立しない。そして、様々な事物を商品化し、商品から商品を生産する（商品Aを消費して商品Bを生産する）構造が商品経済である。商品経済は商人が仲介する「経済」であるが、生産者と消費者の関係を隠蔽しない。したがって商品経済は市場経済より透明で歴史が古いと言えるが、とはいえ商品経済が歴史のもっとも古い「経済」ではない。

「商い」は不可逆な商品交換であるが、単純な物々交換ではない。市場経済下であれ商品経済下であれ、ふつう「商い」は貨幣を使用する商行為である。したがって貨幣経済は市場経済や商品経済より歴史が古い。とはいえ、市場と市場経済がちがうように、あるいは商品と商品経済がちがうように、貨幣と貨幣経済もちがう。そして市場経済や商品経済に起点があるように、貨幣経済にも起点がある。下図（図4）は公文氏の三つのパースペクティヴを拡大して作成した筆者のレベル4パースペクティヴである。

図4 レベル4パースペクティヴ



レベル4パースペクティヴは、貨幣経済時代の全体像である。本書の執筆目的はこのレベル4パースペクティヴを論じ、その下で公文氏の三つのパースペクティヴを論じることであるが、とはいえレベル4パースペクティヴを論じる前に貨幣経済以前の人類史を論じる必要がある。本章で貨幣経済が誕生する前の人類史を手短かに論じる（貨幣経済時代以前の人類史の考察が貨幣経済の起源をあきらかにし、また「貨幣」の妥当な定義につながる）。

人類が金属の製錬をはじめたのは紀元前4000年頃で、最初に製錬した金属は金と銅である。人類は紀元前3500年頃から錫の精錬をはじめ、銅と錫を調合して合金＝青銅をつくり様々な青銅器をつくるようになる。人類が銀の製錬をはじめた時期は不明であるが、おそらく錫の製錬をはじめた時期と同じで紀元前3500年頃である。とはいえ、人類最古の文明＝古代シュメールで金や銀は貨幣化していない。銅も同様である（ギルガメシュ叙事詩に黄金や銀の記述はあるが、金貨や銀貨の記述はない。有名なウルクの「黄金の剣」は王家の象徴であるが、「財」ではない）。

古代シュメール王朝（紀元前2900～紀元前2350年頃）はユーフラテス川下流で誕生した都市国家、あるいは「巨大牧場」である。古代シュメール王朝がメソポタミア全域を支配する場面はなかった。当時のメソポタミアでも商いが行われていたが、貨幣は物品貨幣（家畜や穀物）である。また大地は信仰の対象であり、交換＝売買の対象ではない。

しかし、アッカド王朝がサルゴン王（在位紀元前2334～紀元前2279年頃）の代にメソポタミア中部と南部を統一し、ナラム・シン（サルゴン王の孫。在位紀元前2155～紀元前2119年頃）の代に大地を分割して「土地」に置き換える。そして家臣に分与した。他方、銀の流通もはじまる。おそらく、銀は土地の証文で、分与した土地を交換する場面で使われた。

無限＝可能無限な大地を有限な土地に置き換え、分与して交換＝売買を容認する政策が妥当な政策であったとは言えない。ナラム・シンの死後、アッカド王朝は衰退し、ウル第三王朝（紀元前2100～紀元前2000年頃）がメソポタミア中部と南部を支配する。

ウル第三王朝は古代シュメール王朝に溯行して土地を「大地」に戻す。ウル第三王朝期のメソポタミアで土地分与と土地交換がなくなるが、とはいえ銀は残った。飢饉が生じた場面でウル王が多量の銀を放出してメソポタミア北部から穀物を輸入する場面がある。アッカド王朝期に生じた銀の流通が役立ったと言えるが、しかし銀は交換財の役割を十分担っていない。飢饉後、ウル第三王朝は滅亡する。

ウル第三王朝滅亡後、ふたつの巨大王朝（イシン朝とラルサ朝）がメソポタミア中部と南部を約200年支配する。その後バビロン第一王朝（紀元前1830～紀元前1530年頃）がハンムラビ王（在位紀元前1792～紀元前1750）の代にメソポタミア中部と南部を統一する。後のアッシリア帝国が「バビロニア（メソポタミア中部と南部）」を徹底破壊したため、バビロン第一王朝の記録が十分残っていない。したがってバビロン王が家臣に土地を分与したか否かはわからないが、筆者の想像では、アッカド王朝に遡行して大地＝無限を土地＝有限に戻し、家臣に分与した（ちなみに、有名なハンムラビ法典の碑文が発掘された場所はバビロニアではない。後のアケメネス朝ペルシャの首都スーサである。当時のスーサはエラム王国の首都で、おそらくカッシート朝を滅ぼしたエラム王が戦利品のひとつとして持ち帰った）。

その後小アジアとシリア、メソポタミア北部を支配していたヒッタイトがバビロン第一王朝を滅ぼす。しかしヒッタイトがバビロニアを支配する場面はなかった。バビロン第一王朝滅亡後、東方から侵入したカッシートが約400年バビロニアを支配する。そして紀元前1230年頃の人類史に大きな変化が生じる。

紀元前1230年頃、ヒッタイトで内紛が勃発する。そして紀元前1190年頃、「海の民」が小アジアやシリアの沿岸を襲撃し、ヒッタイトが消滅する（「海の民」のルーツは今も不明である）。その後ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術が東地中海沿岸とメソポタミア各地に伝わる。最大の受益者は小アジアに隣接するメソポタミア北部のアッシリアである。アッシリアは鉄を量産した。アッシリア兵の武装が鉄器になる。軍を強化したアッシリアはメソポタミア全域と小アジアを支配し、シリアとパレスチナ、そして短い期間であったが、エジプトも支配する。

アッシリアは人類史上初の「帝国」を建国した。アッシリアの王はアッシリアの唯一神アッシュルで、大地の神でもある。ウル第三王朝期同様、アッシリアが支配するメソポタミアで土地の分与がなくなる。筆者の想像では、限定された土地だけが分与の対象になり、王＝アッシュルの許可が必要になる。おそらく、神官が分与の是非を判断した（ちなみに、アッシュルは見えない神で、アッシュルの画像や偶像はない。作家の井沢元彦氏が、著書「逆説の世界史（小学館）」で、旧約聖書に登場するバアルを「アッシリアの多神教の主なる神であるバアル」と書いているが、バアルはアッカドの神である）。

他方、アッシュルに仕える副王（すなわち人間のアッシリア王）が征服した地域の住民を別の地域に強制移住する。それにより反逆を防止して「帝国」を護持した。アッシリア期のメソポタミアで、部族の分断と混合が約400～500年続く。

紀元前600年頃、アッシリアが衰退して滅亡する（原因は内紛である）。その後バビロン第二王朝＝カルデアがメソポタミア中部と南部を支配し、リュディアが小アジアとメソポタミア北部、メディアがイラン高原やアルメニア等を支配する。だが、ザグロス山脈中腹（現在のイラン・イスラーム共和国のシーラーズ市付近）で誕生したアケメネス朝ペルシャがキュロス2世（在位紀元前559～紀元前529年）の代にメディアとリュディアを滅ぼし、イラン高原とアルメニア、小アジアとメソポタミア北部を支配する。その後エラム王国を滅ぼしてスーサに遷都し、カルデアも滅ぼしてメソポタミア全域を支配した。

キュロス2世の死後、アケメネス朝ペルシャはシリアとパレスチナ、エジプトも支配する。他方、エーゲ海沿岸（ヒッタイトが「アヒヤワ」と呼んでいた地域）で古代ギリシャ都市国家が誕生する。

（アッシリア帝国の興亡は紀元前1100～紀元前1000年頃からはじまるが、同じ頃、インドで十王戦争が勃発し、アーリア人がカイバル峠を越えてインド北西部のパンジャーブ地方に侵入している。他方、中国の王朝が殷＝商から周＝西周に変遷した。とはいえ、十王戦争で青銅製の武器が使われた痕跡があるが、鉄製武器が使われた痕跡がない。また中国で鉄製武器の使用がはじまるのは呉越抗争が勃発した紀元前430年頃である。すなわち、ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術がユーラシア大陸全域に波及するまで約800年の歳月を要した）

古代ギリシャの歴史家ヘロドトス（紀元前485～紀元前420年）は、著書「ヒストリアイ（歴史）」で最初の硬貨は紀元前670年頃にリュディアが鍛造したエレクトロン貨であると述べているが、カルデアも硬貨＝銀貨を鍛造した（以後、本書では鍛造も含めて「鑄造」と呼ぶ）。だが当時の硬貨は「貨幣」ではない。アッシリア期のメソポタミアでは、古代シュメール期同様、物品貨幣（家畜や穀物）の下で商いが行われていた。大地は唯一神アッシュルの所有物あるいは「身体」であり、交換の対象ではない。

しかしカルデア王は、おそらくバビロン第一王朝を模倣して大地を区切り、土地に置き換えた。そして分与する。分与したのは家臣や支配者層、大商人だけであるが、土地を分与する場面で銀貨が使われた。すなわち、銀貨はカルデア王が分与する土地の証文である。おそらく、リュディアやメディアも同様である。

メディアとリュディア、エラム王国とカルデアを滅ぼしたアケメネス朝ペルシャは支配地域＝版図を20の軍管区に分割する。そして各軍管区が毎年一定量の銀をペルシャ王＝諸王の王（シャーハーンシャー）に献納し、「諸王の王」が銀貨を鑄造して発行する。おそらく、銀貨は「諸王の王」が兵に与える褒賞である。またカルデア同様、分与する土地の証文であったかもしれない。しかし、銀貨と土地を交換する場面＝土地売買はなかった。他方、銀貨と人間＝奴隷の交換がはじまる。それにより人間を強制移住する場面がなくなる（銀貨と物品貨幣の交換は可能であったかもしれないが、あまり行われなかったと思う。なぜなら、古代社会では、農民や奴隷も土地の一部で、人間労働が家畜や穀物のような物品貨幣を生産するからである）。

ヘロドトスは、ペルシャ王ダレイオス1世の代のアケメネス朝ペルシャで各軍管区が献納した銀の量を著書「ヒストリアイ」に記載している。表1は筆者が作成した「ヘロドトスの表」である。各軍管区の正確な地域はわからない。表1の「地域」は、筆者の推測であるが、小アジア南東（あるいはメソポタミア北部）とメソポタミア（あるいはバビロニア）、エジプトはおそらく「諸王の王」の直領である。また銀の代わりに砂金を献納した軍管区はヒンドゥー山脈地帯＝ヒンドゥークシュであると考えてほぼまちがいない（ちなみに、1バビロン・タラントンは約34kgで、1エウポイア・タラントンは約26kgである）。

表1

| | 地域 | 毎年献納する銀、その他の量 |
|----|-----------|--------------------------|
| 1 | 小アジア北西 | 銀400バビロン・タラントン |
| 2 | 小アジア南西 | 銀500バビロン・タラントン |
| 3 | 小アジア内陸 | 銀360バビロン・タラントン |
| 4 | 小アジア南東 | 銀500バビロン・タラントン + 白馬360頭 |
| 5 | シリア、パレスチナ | 銀350バビロン・タラントン |
| 6 | エジプト | 銀700バビロン・タラントン + 小麦約11トン |
| 7 | ガンダーラ地方 | 銀170バビロン・タラントン |
| 8 | ペルシャ湾東岸 | 銀300バビロン・タラントン |
| 9 | メソポタミア | 銀1000バビロン・タラントン + 宦官500名 |
| 10 | イラン高原北西 | 銀450バビロン・タラントン |
| 11 | カスピ海南東 | 銀200バビロン・タラントン |
| 12 | バクトリア地方 | 銀360バビロン・タラントン |
| 13 | アルメニア地方 | 銀400バビロン・タラントン |
| 14 | ペルシャ湾西岸 | 銀600バビロン・タラントン |
| 15 | イラン高原南西 | 銀250バビロン・タラントン |
| 16 | イラン高原北東 | 銀300バビロン・タラントン |
| 17 | イラン高原南東 | 銀400バビロン・タラントン |
| 18 | 南コーカサス地方 | 銀200バビロン・タラントン |
| 19 | 北コーカサス地方 | 銀300バビロン・タラントン |
| 20 | ヒンドゥー山脈地帯 | 砂金360エウポイア・タラントン |

ひょっとして、マケドニア王アレクサンドロス3世（アレクサンドロス大王）の東征目的は多量の銀を獲得して当時のギリシャ銀貨を一元することだったのかもしれない。紀元前4世紀後半、アレクサンドロス3世はアケメネス朝を滅ぼし、古代ペルシャ帝国の版図を支配する。その後各軍管区にギリシャ人植民都市と銀貨鑄造施設を建設した。しかし農民や奴隷がいなければ「土地」ではない。各植民都市は、鑄造した銀貨をマケドニア＝ギリシャに送り、必要な農民や奴隷を獲得した。

各植民都市がローカルな商行為で銀貨を使用する場面はなかった。また銀貨を徴税する場面もなかった。すなわち、ヘレニズム期に貨幣経済は誕生していない。各植民都市は、多量のペルシャ製ギリシャ銀貨を鑄造したかもしれないが、ギリシャから農民や奴隷を得るための手段にすぎなかった。

（銀貨を一元していた古代アケメネス朝ペルシャでは、家畜や穀物のような物品貨幣に利息が生じる場面があっても銀貨に利息＝金利が生じる場面はない。しかし古代ギリシャでは、各都市国家が異なる銀貨を鑄造している。そのため、都市国家間で銀貨と銀貨の交換が生じ、銀貨と奴隷の交換も生じた。そして銀貨と銀貨、銀貨と奴隷を交換する過程でおそらく金利や差益が生じた。他方、古代ギリシャはエジプトから穀物を「輸入」している。オリーブ油とパンを交換する場面もあったと思うが、多くの場合、銀貨と物品貨幣＝穀物等を交換していたように思う。すなわち、銀貨は食料を得るための手段であった。したがってプラトンやアリストテレスは銀貨と銀貨、銀貨と奴隷の交換を嫌い、金利や差益を嫌った。しかしアレクサンドロス3世は、銀貨と銀貨の交換を嫌ったが、銀貨や金貨と奴隷の交換を容認したように思う。現代の感覚では、古代の銀貨や金貨は貨幣ではない。穀物等が貨幣である。とはいえ、紀元前430年前後から銀貨と銀貨、銀貨や金貨と奴隷の交換がはじまり、銀貨や金貨の特殊貨幣化がはじまる。ちなみに、物品貨幣の「利息」とは、一粒の麦を借りて翌年二粒にして返すとか、一頭の子羊を借りて数年後に二頭にして返すといった類の取引である。自然の循環と再生が物品貨幣の利息を可能にした。しかし中世に「富（消える自然循環物）」と「財（消えない非自然循環物）」が結合して「富財」になり、物品貨幣＝穀物等の利息と特殊貨幣＝銀貨等の金利も結合する。そして近代に「商品」が誕生し、貨幣に交換差益＝為替差益が生じる。だが筆者の知る限り、経済学者やエコノミストたちは貨幣の金利や為替差益をそのように認識していない。彼らは富と財、商品を仕分ける作業さえ十分行っていない。彼らにとって、貨幣の金利や為替差益は普遍的法則である）

アレクサンドロス3世の死後、家臣のセレウコス1世がエジプトと小アジアを除くペルシャ帝国の版図を支配する。しかしメソポタミア以東からアム川流域とヒンドゥー山脈地帯、およびインダス川流域までの広い範囲で反乱が多発した。セレウコス1世は、メソポタミアで首都セレウキアを建設したが、シリアに新都アンティオキアを建設して遷都する。セレウコス1世の死後、アム川およびインダス川流域が独立してバクトリア王国を建国した。またカスピ海南東でアルサケス朝が誕生する。

セレウコス朝は、アンティオコス3世の代に東征して版図を再現するが、マグネシアの戦いで古代ローマに破れ事実上滅亡する（当時のローマはカルタゴを滅ぼし、その後ギリシャと小アジアを支配していたマケドニア朝を征服して国力が増大していた。ちなみに、第二次ポエニ戦争でローマ軍に敗北したカルタゴの名将ハンニバルがセレウコス朝に亡命して参謀になっている。しかし、ハンニバルがセレウコス朝ギリシャ軍を率いる場面はなかった）。

アンティオコス3世の死後、バクトリア王国はアム川流域のグレコ・バクトリア王国とインダス川流域のインド・ギリク朝に分裂する。グレコ・バクトリア王エウクラティデス1世がインド・ギリク朝に侵攻して再統一を目指す。彼が不在の間にアルサケス朝の王に即位したミトラダテス1世がグレコ・バクトリア王国に侵攻する。その後グレコ・バクトリア王国は衰退し、北方の遊牧民（トハラ人あるいはサカ人）が侵入して滅亡する。他方、インド・ギリク朝はメナンドロス1世＝ミリンダ王の代に最盛期を迎える。しかし彼の死後、北方の遊牧民が侵入して滅亡する。インド・ギリク朝滅亡後、クシャーナ朝がアム川流域とインダス川流域、ヒンドゥー山脈地帯を含む北インド全体を支配した。そしてカニシカ1世＝カニシカ王（在位144～173年頃）の代に最盛期を迎える。

他方、グレコ・バクトリア王国に侵攻したミトラダテス1世はその後反転してイラン高原に侵攻する。ミトラダテス1世は、イラン高原を征服し、さらに進軍してメソポタミア南部も支配した。

アルサケス家は、アケメネス家と無縁であったが、敬虔なゾロアスター教徒の家系であった。メソポタミア南部を支配した後、ミトラダテス1世は銀貨を鑄造して発行し、第二ペルシャ帝国＝アルサケス朝ペルシャを開国する。そして紀元前123年に即位したミトラダテス2世が「諸王の王」を称した。ミトラダテス2世はメソポタミア中部と北部を征服し、チグリス川東岸に新都クテシフォンを建設して遷都する。そして紀元前92年、古代ローマと協定を結び、ユーフラテス川をローマとペルシャの境界にする。

だが紀元前53年、古代ローマで三頭政治の一翼を担っていたクラッススがローマ軍を率いてユーフラテス川を越え、メソポタミアに侵攻する。アルサケス朝の貴族スレナスが奮戦してローマ軍を撃退し、クラッススは戦死したが、その後約300年、古代ローマとアルサケス朝ペルシャ（パルティア）の戦争が続く。この「300年戦争」は概ねローマの侵略戦争であったが、アルサケス朝は疲弊し、サーサーン朝が王位を篡奪する。

(歴史家のシェルドンは、著書「ローマとパルティア(白水社)」で、「ローマが無謀な侵略戦争を繰り返し、その後アルサケス朝より手強いサーサーン朝と争うことになった」と述べている。そしてイラク戦争をはじめたアメリカもローマと同様になるかもしれない、と危惧している。ちなみに、歴史家の山本由美子氏によれば、詩人フェルドウスウィーの著書「シャーナメ(王書)」で登場するペルシャの英雄ロスタムのモデルはスレナスである)

ところで、アレクサンドロス3世とギリシャ軍が東征する約半世紀前の古代アケメネス朝ペルシャでアラム文字(アルファベット)が普及し、話し言葉と書き言葉がひとつになる。識字率がどうあれ、知識人や文化人は文字を学ぶ。すなわち、言文一致は政治に影響を及ぼし、教育や文学、宗教に影響を及ぼす。

古代アケメネス朝ペルシャで文語(古語)と口語が併存するようになった。だが伝統的な信仰=ゾロアスター教の祭儀や教典を文語から口語に改めるのは容易でない。しかし外来信仰=仏教等の祭儀や教典は口語に翻訳するしかない。また、新信仰=ミトラ教等の祭儀や教典も口語になる。

セレウコス朝衰退後、新たに誕生したアルサケス朝ペルシャで外来信仰と新信仰が広まる。そして紀元前2世紀~紀元前1世紀頃のシリアやパレスチナ、エジプトで外来信仰が広まり、西暦1~2世紀頃に新信仰が広まる。その典型がキリスト教である。

新約聖書はギリシャ語の巻物である。しかも旧約聖書より先に編纂されている(アルサケス朝の歴代王は敬虔なゾロアスター教徒であったが、異教や異端に寛容であった。たとえば、中国で最初に仏典を漢訳したのは外来僧の安世高であるが、僧侶になる前の安世高はアルサケス朝の太子である)。

本節の前半で述べたように、アケメネス朝ペルシャは軍管区を制定し、「諸王の王」が各軍管区から毎年一定量の銀を徴収した。とはいえ各軍管区の長=サトラップは世襲が多く、毎年一定量の銀を献納すれば他は自由である。すなわち、サトラップが軍管区内の徴税権を有し、彼を中心とする評議会が軍管区内の治安や裁判を担った。古代アケメネス朝ペルシャは地方分権型の帝国であった、と言える。銀貨の鑄造と発行は「諸王の王」が独占していたが、銀貨は概ね兵に与える褒賞であり、人間=奴隷を獲得するための手段である(徴収した銀を「諸王の王」が神託し、銀貨を鑄造して貨幣化したとの説もあるが、筆者の認識では、アケメネス朝期のペルシャでゾロアスター教は治教化=国教化していない。したがって、筆者は「神託による銀の貨幣化」説に同意できない)。

アルサケス朝ペルシャは古代アケメネス朝ペルシャ以上に分権型帝国になるが、支配体制はギリシャ帝国=ヘレニズム帝国を模倣した。そして土地交換を容認する。アルサケス朝ペルシャで土地交換=土地売買がはじまり、「諸王の王」から多額の褒賞=銀貨を得た貴族の力が増大する(アルサケス朝期のペルシャでは、7大貴族の力が絶大で、「諸王の王」以上に強大な貴族もいた)。

アルサケス朝ペルシャの「諸王の王」は銀貨の鑄造と発行を独占していない。アルサケス朝ペルシャで奴隷売買と土地売買が進展し、古代ローマでも奴隷売買と土地売買が進展した。アルサケス朝ペルシャはヴォロガセス1世(在位51~78年)の代に銀貨にアラム文字を刻むが、地方分権型の帝国=古代帝国は続いた(ミトラダテス1世が発行した銀貨に刻まれた文字はギリシャ文字である)。そして銀貨と人間=奴隷の交換、および銀貨と土地の交換が進展し、銀貨の特殊貨幣(主に人間=奴隷や土地の交換を担う特殊貨幣)化が進展する。おそらく、古代ローマも同様である。だが226年にアルサケス朝からペルシャ王位を篡奪したサーサーン朝がすべてを刷新する。

(中国では、前漢と後漢の時代(紀元前206~紀元220年)に銀貨の特殊貨幣化が進展した。とはいえ、前漢の武帝が銀貨の一元を試みたが成功していない。三国時代に銀貨がどのような役割を担ったかは不明であるが、魏普南北朝時代の貨幣は銅貨と絹である。隋唐時代の中国も同様である)

歴史家たちは、「諸王の王」の宗教的権威を高めるためであったと論じている。しかし復古主義下で幕藩体制を潰した日本は近代国家に変貌した。第三ペルシャ帝国=サーサーン朝ペルシャも同様である。

既存の官僚機構を潰せば新たな官僚機構が必要になる。また、サーサーン朝は版図内の銀山と銀貨鑄造施設を支配し、銀貨の発行を独占して全軍管区の支配も目指した。そのための「道具」として、ゾロアスター教を国教化する。

サーサーン朝ペルシャは、ゾロアスター教の下で多様な土着信仰を糾合し、多様な慣習法を統合して体系化する。すなわち、サーサーン朝ペルシャで国教化したゾロアスター教が「諸法の法(最高法規)」になる。そして司祭が官僚=神官になり、裁判を担う。おそらく、徴税と各地の銀山、銀貨鑄造施設の経営も神官が担った(シャープール1世(在位241~272年)の代にゾロアスター教の祭司長に就任したキルデルは、立法と司法を支配する最高裁判長であった)。

第三ペルシャ帝国=サーサーン朝ペルシャで「国教」が誕生し、国教の下で多様な慣習法が体系化して中央集権的な帝国=中世帝国が誕生した。そして銀貨が制度=財貨になる(コラム6)。

コラム6： 祭政一致と政教一致のちがい

国教が存在しない古代帝国の祭政一致と国教が存在する中世帝国の政教一致は異なる。サーサーン朝ペルシャでは、神官が文官を兼務し、銀貨の鑄造と発行、徴税や裁判等を担った。だが神官が武官を兼務して戦場に赴く場面はない。サーサーン朝ペルシャは官僚を武官と文官＝神官に分離し、軍政と民政を分離した。そして軍政と民政を統合する唯一の存在として「諸王の王（シャーハーンシャー）」が君臨する。軍政と民政を分離し、武官と文官が同じ中心（同じ皇帝あるいは「諸王の王」）を共有する体制のはじまりが中世帝国のはじまりである。

ちなみに、古代帝国は軍政と民政を分離していないし、官僚も武官と文官に分離していない。たとえば、アレクサンドロス3世に敗北したダレイオス3世は前ペルシャ王を殺害した軍司令バゴアスが傍流から選り推戴した「諸王の王」であるが、バゴアスは宦官である。ふつう、宦官は軍と無縁であるが、バゴアスは文官であり武官でもある。バゴアスは反乱を起こしてアケメネス朝ペルシャから独立したエジプトを再征服する。その後ペルシャ王アルタクセルクセス3世を殺害し、次のペルシャ王アルセスも殺害する。

おそらく、アルタクセルクセス3世とアルセスの施政に瑕疵があった。だからエジプトで反乱が勃発した。だが、即位後、ダレイオス3世はバゴアスを処刑する（ペルシャ兵たちは、あんな「諸王の王」の下では戦えない、と思ったかもしれない）。

歴史家の多くが、アッシリアが人類史上初の「帝国」として論じている。筆者は彼らの言説にしたがって本節を執筆したが、アッカドが最初の「帝国」として論じる歴史家もいる。しかし、現実には、古代アケメネス朝ペルシャがアッカド的体制とアッシリア的体制を結合して古代帝国の体制＝スキームを構築した、と言うべきかもしれない。

（柄谷行人氏は、古代アケメネス朝ペルシャが最初の「帝国」として認識しておられるようである。筆者に異論はない。だが、柄谷氏は国教もアケメネス朝ペルシャが発明したと認識しておられるように見える。しかし、国教を発明したのはサーサーン朝ペルシャである。アケメネス朝期のペルシャでは、ゾロアスター教はたんに王家の信仰であって国教＝治教ではない。キュロス2世は小アジアを征服した後、リュディア王を家臣にし、彼の信仰＝アポロニウス信仰を容認した（ギリシャ神話に登場するアポロニウスは小アジアの神である）。ダレイオス1世の後を継いだクセルクセス1世（在位紀元前485～紀元前465年）は古代ギリシャ都市国家と戦争を繰り返す、その後エジプトを征服したが、彼はゾロアスター教に帰依しない家臣に苦勞した。また、彼の二人目の妃はユダヤ人女性エステルである。クセルクセス1世の後を継いだアルタクセルクセス1世（在位紀元前474～紀元前424年）は異教に寛容で、古代ギリシャとエジプトの交易を容認した。そしてアルタクセルクセス2世（在位紀元前404～紀元前358年）の代に古代シュメールの女神イシュタル（イナンナ）と習合したアナーヒター、および太陽神ミスラがゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーと同格になる。しかしアナーヒターもミスラもゾロアスター教の神になったわけではない。ミスラがゾロアスター教の神になるのはサーサーン朝ペルシャ期である。したがって、筆者はアケメネス朝ペルシャが慣習法を統合して法体系を構築する場面はなかったと考える。余談であるが、ヒンドゥー教の下でミスラが阿修羅（アスラ）になり、仏教の下でが弥勒（ミトラあるいはマイトレーヤ）になる）

アッカド王は征服した地域を家臣に分け与えた。当時において、それは兵役に対する褒賞であり、土地の分与である。アケメネス朝ペルシャ王も家臣に銀貨を与え土地を分与した。とはいえ、アッシリアのように、征服した地域の住民を強制移住する場面がない。キュロス2世は、カルデアを滅ぼした後、バビロン在住ユダヤ人の移住（エルサレムへの帰還）を容認した。ユダヤ人たちはキュロス2世を歓迎したが、それは移住を容認し、同時に強制しなかったからである（むしろゾロアスター教も強制していない。上で述べたように、彼はリュディア王のアポロニウス信仰を容認している）。

キュロス2世はメソポタミアに残ったユダヤ人たちに土地を分与し、徴税した。とはいえ重税ではなかったと思う。アルタクセルクセス1世もアルタクセルクセス2世も異教に寛容で、ユダヤ人たちは彼らを敬愛した。旧約聖書のエズラ記とネヘミヤ記からそれを読み取ることができるが、アルタクセルクセス3世の代に寛容の精神がおそらくなくなる。それが、エジプトで反乱が勃発した原因かもしれない。

古代帝国は版図の拡大が困難になり、土地の分与が困難になった場面で消滅する。しかし中世帝国にそのような場面はない。むしろ皇帝や「諸王の王」が住民を強制移動する場面もない。だが、貨幣経済の進展が人間の移動を促進する。

2. 2 3世紀の「グレート・リセット」

古代ローマでは、執政官（コンスル）が属州民＝自由農民から物品貨幣（家畜や小麦）を徴税し、ローマ市民に分配していた。したがってローマ市民に労働＝農耕等の必要はない。他方、ローマ市民は兵役の義務を負う。古代ローマは、ローマ市民を労働から解放して兵員化し、軍事力を強化して版図を拡大した。そして属州と属州民（自由農民等）を増加していた。

紀元前66年、三頭政治の一翼を担っていたポンペイウスが小アジアのポントス王国を征服し、その後アンティオキアを支配してシリアを属州化する（セレウコス朝が完全消滅したのはこのときである）。ポンペイウスはさらにエルサレムを陥落し、パレスチナも属州化する。他方、カエサルがガリア地方（現在のフランス）を属州化した。だが、クラッススの死後、三頭政治が瓦解して内戦が勃発する。

内戦を征圧して初代ローマ皇帝に即位したアウグストゥス（オクタウィアヌス）はプトレマイオス朝を滅ぼしてエジプトを属州化した。他方、シリアとパレスチナを解放して彼を支援し続けたヘロデにユダヤ王国の建国を認める。だがヘロデの死後、古代ローマは再度シリアとパレスチナを属州化し、徴税をはじめめる。そのためユダヤ戦争（西暦66～74年）が勃発した。

古代ローマは多数のユダヤ人を殺害してシリアとパレスチナの属州支配を維持する。そして各属州に軍団を置く。エルサレムには一個軍団が駐屯した。

ダキア地方（現在のルーマニア）を除けば、五賢帝時代（1世紀末～2世紀後半）の古代ローマは版図をライン川以西のガリア地方やブリタニア地方（現在のイングランドやフランスのブルターニュ地方等）、イベリア半島全域、ドナウ川以南のバルカン半島全域と黒海南西岸、およびクリミア半島沿岸、ユーフラテス川上流以西、そして小アジア全域とシリア、パレスチナ、エジプト、サハラ砂漠以北＝北アフリカ全域に拡大した。歴史家や社会学者たちは、ローマ市民が住む版図内の都市を「中心」と呼び、属州民が住む地域を「周辺」、版図外を「外部」と呼んでいる。そして、おそらくアッカド帝国やアッシリア帝国、アケメネス朝ペルシャ帝国も同様であったと考え、この「中心－周辺－外部」のスキームを「帝国」と呼んでいる。だが、この古代ローマのスキーム＝古代帝国は3世紀に瓦解する。

212年、ローマ皇帝セウェルスが死去し、彼の息子カラカラが即位する。即位後、カラカラは勅令＝アントニヌス勅令を発令して奴隷を除くすべての属州民にローマ市民権を与える。それによりローマ軍が巨大化した。

アレクサンドロス3世を信奉していたカラカラは、大軍の力で版図外＝外部の富財を略奪し、新生ローマの建設を目指した。だが、アレクサンドロス3世とちがい、カラカラは姑息であった。カラカラはオスロエネ王国の王を騙し、メソポタミア北部を属州化する。同じ手口でアルメニア王国の王族も騙し、現在のグルジアとアゼルバイジャン、アルメニアを含む南コーカサス地方を属州化しようとする。

しかしアルメニアの民衆が反発した。カラカラはローマ軍を派兵して属州化を強行するが、ローマ軍は敗退する（カラカラに騙されたオスロエネ王アブガル9世はキリスト教に帰依していたようである。また、キリスト教を国教化した最初の王国はアルメニア王国である）。

にもかかわらず、カラカラはアルサケス朝ペルシャ（パルティア）に進軍し、古代ローマの版図を拡大しようとする。戦闘は216年にはじまったが、翌年、カラカラは部下に殺害される。そして218年、古代ローマはアルサケス朝ペルシャと和睦した。

他方、ローマ軍との戦いでアルサケス朝が疲弊し、サーサーン朝がペルシャ王位を篡奪する。王位篡奪後、初代サーサーン朝ペルシャ王アルダシール1世は小アジアに進軍する。アルダシール1世の死後、彼の息子シャープール1世が「諸王の王」に即位し、ローマとサーサーン朝ペルシャの戦闘が激化した。

259年、シャープール1世率いるサーサーン朝ペルシャ軍はエデッサの戦いで当時のローマ皇帝ウァレリアヌスを捕縛し、首都クテシフォン（バグダード南東に存在した古都）に連行する。その後ローマで「3世紀の危機」が勃発する。

260年、ガリア地方とブリタニア地方、イベリア半島（現在のフランスとイギリス、スペインとポルトガル）が独立してガリア帝国を建国する。さらにサーサーン朝ペルシャの侵攻を阻止していたローマ軍東方司令オダエナトゥスの死後、彼の妻ゼノビアが小アジア東部（カッパドギア）とシリア、パレスチナ、エジプトを支配してパルミラ王国を建国する。ローマは三つに分裂した。

273年、ローマ皇帝アウレリアヌス率いるローマ軍がパルミラ軍を撃退してゼノビアを捕縛する。翌274年、ガリア帝国が自壊した。ローマは「3世紀の危機」を脱して版図を再現するが、しかし古代帝国のスキームは再現しなかった。すなわち、アントニヌス勅令下でローマ市民権を得た属州民がローマ市民権を手離す場面はなかった。その後ローマもサーサーン朝ペルシャと同様な中世帝国に変貌する。

メソポタミア全土を支配したサーサーン朝ペルシャ王シャープール1世は、アルメニア王国も支配し、さ

らなる版図の拡大を目指す。サーサーン朝ペルシャ軍は西方でローマ軍と交戦し、東方でクシャーン朝軍と交戦した。精強なクシャーン朝軍に苦戦したシャープール1世は、中央アジアの遊牧民エフタルと同盟を結び、クシャーン朝を挟撃する。

サーサーン朝ペルシャはホラーサーン地方（概ね現在のイラン北東部とアフガニスタン北西部、トルクメニスタン南西部）を占領し、エフタルはクシャーン朝を滅ぼしてバクトリア地方とガンダーラ地方（概ねアム川流域とインダス川流域、ヒンドゥー山脈地帯）を占領した。だが、その後エフタルがサーサーン朝ペルシャに敵対する。

他方、ローマでは284年に即位したディオクレティアヌス（在位284～305年）が軍政を東西分割し、北方の守備（ゲルマン人の侵入等からの防衛）と北アフリカの統治を共同皇帝マクシミアヌスに委ね、自身が東方のサーサーン朝ペルシャと対峙する。

297年、副帝ガレリウス率いるローマ軍がサーサーン朝ペルシャ軍を破り、メソポタミア北部を奪取してアルメニア王国を解放した。その後ディオクレティアヌスが和議を成立させ、ローマに有利な条件で境界を定める。サーサーン朝ペルシャの動向を抑止した後、ディオクレティアヌスは軍政と民政を分離し、民政を中央集権化した。そして人頭税を制定する。以後、ローマの税収がもっぱら人頭税になる。

（カラカラが発令したアントニヌス勅令により、属州民の大多数がローマ市民になる。そのため属州民の納税＝農税が事実上消滅した。したがって、人頭税の目的は農税の補填あるいは代替である。他方、人頭税を徴税するには民政と軍政の分離、そして民政の中央集権化が不可欠であった。筆者の憶測であるが、ディオクレティアヌスはサーサーン朝ペルシャを模倣して人頭税を制定したように思う）

ところで、アレクサンドロス3世を信奉していたカラカラは銀貨の交換差益を嫌ったようである。即位後（アントニヌス勅令を発令する少し前）、カラカラは純銀含有量を大幅に削減した新ローマ銀貨を発行する。カラカラの死後、ローマ銀貨の純銀含有量はさらに低減し、事実上の銅貨になる。ディオクレティアヌスが皇帝に即位した頃のローマは、銀貨と土地の交換ができなくなっていたかもしれない。

古代ローマも、古代ギリシャや古代アケメネス朝ペルシャ同様、家畜や穀物のような物品貨幣が「貨幣」である。銀貨の特殊貨幣化は進展していたかもしれないが、銀貨と物品貨幣を交換する場面はあまりなかったし、その必要もなかった。したがって銀貨と土地や人間＝奴隷の交換ができなくなっていたとすれば、銀貨の価値は非常に小さい（作家の塩野七生氏は、カラカラ後の古代ローマでインフレが勃発したと論じておられるが、貨幣の使用価値が低減する現代のインフレとは性質がちがう。古代ローマのインフレは制度危機である。銀貨の純銀含有量低減が銀貨と土地や人間＝奴隷の交換を困難にし（だからカラカラはアントニヌス勅令を発令したわけだが）、銀貨が制度的信用を喪失する「インフレ」であった）。

ディオクレティアヌスは純銀含有量100パーセントの新銀貨を発行してローマ銀貨の制度的信用を回復しようとした。そして銀貨で人頭税を徴税する（すなわち、徴税を物納から金納に変更した）。だが、版図内の銀山が枯渇していたため、多量の純銀含有量100パーセント銀貨を鑄造できなかった。新銀貨の発行量は不十分で、ディオクレティアヌスの金融財政政策は破綻する（他方、サーサーン朝ペルシャは純銀含有量70パーセント以上の銀貨を鑄造して発行し続けている）。

ディオクレティアヌス退位後、ローマで内戦が勃発する。内戦を征圧して即位したコンスタンティヌス1世（在位306～312年）はディオクレティアヌスの改革を継承する。コンスタンティヌス1世は新金貨＝ソリドゥス金貨を鑄造して発行した。他方、新都コンスタンティノーブルを建設してキリスト教を公認する。新金貨発行とミラノ勅令は無関係ではない。

（現在のイスタンブルがコンスタンティノーブルである。古代ギリシャの都市国家メガラがマルマラ海西岸に植民都市ビュザンティオンを建設したが、コンスタンティヌス1世がローマ都市に改造して命名した。ちなみに、黒海とマルマラ海をつなぐ海峡がボスポラス海峡で、マルマラ海とエーゲ海をつなぐ海峡がダーダネルス海峡である。マルマラ海の面積は瀬戸内海の半分程度である）

バビロン第二王朝＝カルデアが銀貨を鑄造して発行したが、人類が金貨を鑄造して発行するのは少し後で、筆者の認識では古代ギリシャが古代アケメネス朝ペルシャが最初の金貨を鑄造して発行した（ちなみに、アレクサンドロス3世の父フィリッポス2世が、パンガイオン山で産出する金を分配してマケドニア軍を編成している）。

古代ギリシャや古代アケメネス朝ペルシャの頃から、金貨と銀貨が併存していた。古来の慣習にしたがえば、新ローマ金貨＝ソリドゥス金貨とペルシャ銀貨の交換は可能である。当時、ローマとサーサーン朝ペルシャは敵対していたが、信仰集団間の信用関係（あるいは扶助関係）が交換を具現したように思う。おそらく、キリスト教会とゾロアスター教会が相当量のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換を仲介した。ローマも、サーサーン朝ペルシャ同様、金貨が「財貨」になり、その後銀貨も「財貨」になる（コラム7、コラム8）。

コラム7： ローマ金貨とペルシャ銀貨

古代ローマでは、エジプトは皇帝の直屬領で、エジプトの富＝穀物等はすべて皇帝の「富」である。カラカラはアントニヌス勅令を発令してローマ市民＝兵員を増員し、ローマ軍を巨大化したが、増員した兵を養うだけの「富」は十分あったと思う。

カラカラは純銀含有量を50パーセント強に落とした新銀貨（それまでローマ銀貨の純銀含有量は100パーセント弱であった）を発行したが、サーサーン朝ペルシャは純銀含有量70パーセント以上の銀貨を鑄造して発行し続けている。そのため、ペルシャ人がエジプト等の土地を「買う」場面が生じたかもしれない。それが、ディオクレティアヌスが純銀含有量100パーセントの新銀貨を鑄造して発行し、人頭税を制定して銀貨を徴税した本当の理由であるかもしれない。

しかし当時のローマは版図内の銀山が枯渇していた。コンスタンティヌス1世が鑄造して発行した新金貨＝ソリドゥス金貨がペルシャ人の土地買収を抑制し、他方、ペルシャ銀貨の獲得を容易にして銀貨の徴税を可能にしたように思う。

当時、ローマは北アフリカとエジプト、パレスチナやシリア等を支配し、アフリカで産出する金を得ていた。他方、前節で記載した「ヘロドトスの表」から察するに、サーサーン朝ペルシャは多数の銀山を保有していたが金山を保有していない（ヒンドゥー山脈地帯はサーサーン朝ペルシャの版図外であった。余談であるが、アレクサンドロス3世率いるギリシャ軍がインドに向かった目的は金の獲得だったかもしれない）。しかしインドや中国の物産（綿織物や絹織物等）を得る場面で金や金貨が必要な場面がおそらくあった。

とはいえ、ローマとサーサーン朝ペルシャは敵対している。したがってキリスト教会とゾロアスター教会がローマ金貨とペルシャ銀貨の交換を仲介した。当時のキリスト教の中心地はシリアのアンティオキアである。そして、キルデールが死去し、サーサーン朝ペルシャの異教弾圧が緩くなっていた。しかも301年にアルメニア王国がキリスト教を国教化し、サーサーン朝ペルシャと良好な関係を築いていた。

コラム8： 貨幣経済と貨幣クラス

インドや中国との交易が活発化していたサーサーン朝ペルシャでは、銀貨と物品貨幣が漠然とした集合を形成していた。ローマでは、おそらくディオクレティアヌスの税制改革（人頭税や徴税の金納化等）が契機になる。そして、コンスタンティヌス1世の代に金貨と物品貨幣が漠然とした集合を形成する。

ローマ金貨とペルシャ銀貨の交換が本格化したのはテオドシウス1世（在位379～395年）の代である。サーサーン朝ペルシャでは、ゾロアスター教の下で慣習法が体系化し、ゾロアスター教会が統治機構になる。ローマでもアタナシウス派キリスト教の下で慣習法が体系化し、アタナシウス派キリスト教会が統治機構になる（紀元前449年、古代ローマは十二表法を制定した。十二表法は「ローマ法」のはじまりであるが、その後約1000年の歴史過程で様々な慣習法が生じた。そしてテオドシウス1世の代に慣習法の体系化がはじまる。438年、「テオドシウス法典」が完成した）。

国教会（アタナシウス派キリスト教会とゾロアスター教会）はローマ金貨とペルシャ銀貨の交換を仲介した。「交換」は等価交換に準ずる等比交換であった。

（筆者は、ローマ金貨とペルシャ銀貨を交換する場面で差益は生じなかったと考える。他方、交換差益＝為替差益をなくしたことが、順序構造＝貨幣経済の形成につながる。ちなみに、為替差益と金利を同様なものであるかのように論じる経済学者やエコノミストがいるが、まちがっている。歴史家が、差益と利息が未分な古代社会に遡行してそのようなことを言うのはよい。しかし近代社会では、為替差益が縮小した場面で金利が露呈し、金利が縮小した場面で為替差益が露呈する。資本主義経済の下で為替差益が貨幣の商品的側面＝商品的使用価値に依存し、金利が貨幣の道具的側面＝資本的使用価値に依存するからである。他方、中世社会では、「広義の中世」の出現期に国教会が為替差益をなくし、「広義の中世」の突破期に金利をなくす場面がある。中世は、貨幣は存在したが、現代人が想定する商品や資本は存在しなかった、とも言える）

アタナシウス派キリスト教会とゾロアスター教会は、おそらく「全世界の金の価値と全世界の銀の価値は等価である」という観念を共有した。筆者は、そのような巨大等価交換観念の下でローマ金貨とペルシャ銀貨の等比交換が具現したと考えるが、そのような「想像の産物」を共有するには事実上の最高法規＝国教と統治機構＝国教会が不可欠である。

国教会は金融も営んだ。国教会の下で金貨や銀貨が財貨＝統治制度になり、財貨が土地や奴隷を財産化して土地売買や奴隷売買に関与する人々が増大する。むしろ国教会も土地売買や奴隷売買に関与した。そして「荘園」が誕生する。

ローマ金貨とペルシャ銀貨の交換関係の下で、ローマ金貨とペルシャの物品貨幣の交換が生じ、ペルシャ銀貨とローマの物品貨幣の交換も生じる。そしてローマの物品貨幣とペルシャの物品貨幣の直接的な交換、すなわち帝国間の「物々交換」が消滅する。

その後ローマ金貨とローマの物品貨幣が貨幣クラス＝金貨クラスを形成し、ペルシャ銀貨とペルシャの物品貨幣がもうひとつの貨幣クラス＝銀貨クラスを形成する。そして財貨と財貨の交換関係が貨幣クラスと貨幣クラスの交換関係に進展する。すなわち、財貨と物品貨幣の境界が曖昧になる。

財貨と財貨の交換関係が貨幣経済を形成するが、貨幣経済の数学的基本構造は順序構造であり、交換関係は等価交換に準ずる等比交換である。交換関係が貨幣クラスと貨幣クラスの交換関係に進展し、「広義の中世」の突破期にカトリック教会が為替差益だけでなく金利も否定する場面が生じるが、順序構造が別の構造（位相構造や代数構造）に置き換わるわけではない。

貨幣経済の下では、どれだけ有用でどれだけ希少な事物であっても、物品貨幣化して貨幣クラスのメンバにならない限り、交換の対象にならない。他方、売り手と買い手の関係は対称で、対称性の継続が商人の信用になる。「広義の近代」の出現期に、位相構造＝商品経済が生成して売り手と買い手の関係が非対称化するが、順序構造＝貨幣経済は残り、「信用」も残る。

（ふたつの物品貨幣の存在が貨幣経済が生成する必要条件である。そしてふたつの財貨の存在が貨幣経済が生成する十分条件である。その後ふたつの財貨とふたつの物品貨幣がふたつの貨幣クラスを形成するが、ふたつの中世帝国が存在しなければふたつの物品貨幣もふたつの財貨も存在しない。ユーラシア大陸西部では、ローマとサーサーン朝ペルシャが存在した。同時代のユーラシア大陸東部＝中国は魏晉南北朝時代である。当時の中国に北魏と宋が存在した。北魏の財貨は絹で、宋の財貨は銅貨である）

ところで、国教会は異端や異教を敵視したが、観念的な理由で敵視したわけではない。国教会＝統治機構が異端や異教を敵視した理由は国教＝最高法規と財貨＝統治制度の維持である（さらに荘園と奴隷労働の維持である）。

とはいえ、国教は土着信仰を糾合し、土着の掟＝慣習法を統合する。そして変貌する。キリスト教は一神教であるが、国教化したキリスト教は何人もの天使や聖人をつくり、何人もの悪魔や魔術師をつくった。仏教は多神教であるが、国教化した仏教は神性をひとつにする。ゾロアスター教やイスラーム教もおそらく同様である。筆者は信仰に疎いが、一神教の多神教化や多神教の一神教化は国教会が「法」や「制度」を担う都合上の出来事であったと理解したい。

しかし宗教家や哲学者たちは、天使や悪魔がたくさんいる一神教が多神教でないこと、最高神が存在する多神教が一神教でないことをそのように説明しない。むしろ重視すべきことは、一神教であれ多神教であれ、国教化した信仰が持つ異様な政治性と暴力性である。筆者の見るところ、宗教家や哲学者たちは国教と非国教のちがいを、および国教の政治性と暴力性に深くコミットしていない。

たとえば、故吉本隆明氏や中沢新一氏は、国教と非国教のちがいを深く考えていないし、国教の政治性と暴力性も深く考えていないように思う。オウム真理教が国教を目指していたのはあきらかであるが、吉本氏も中沢氏もオウム真理教のそのような側面を見落としていた。

そして残念なことに、経済学者やエコノミストたちが、それが国教に由来するかもしれないと考えることなく、貨幣の神秘性を論じる場合がある。彼らは、貨幣の神秘性を論じる場面で信仰を国教と非国教に仕分ける必要があると考えたことさえおそくない。

2. 3 「広義の中世」と「広義の近代」、「広義の現代」

ディオクレティアヌスの軍政と民政の分離、軍政の東西分割と民政の中央集権化により、ローマの防衛と治安が強固になる。他方、武官や文官の人数が増大して官僚機構が肥大化する。そして人頭税が民衆の負担を増大し、自由農民が減少して荘園が巨大化する。その後コンスタンティヌス1世が新金貨を鑄造して発行し、キリスト教を公認する。

361年、コンスタンティヌス朝最後の皇帝ユリアヌスが即位する。ユリアヌスは腐敗と華奢を嫌い、アリウス派キリスト教会と対立した。そして形骸化した元老院を再生して減税等を実施し、古代ローマの政体と古代ギリシャ文化の再現を試みるが、ペルシャ戦役で戦死する。ユリアヌスの死後、ローマはメソポタミア北部を割譲し、サーサーン朝ペルシャと和睦する（コラム9）。

364年に即位したヴァレンティニアヌス1世はユリアヌスの政策を概ね継承したが、その頃からフン族が移動しはじめ、ゲルマン人の「大移動」がはじまる。378年、東方のフン族に押されたゲルマン人＝東ゴート族がドナウ川を越え、ローマの版図内に侵入した。そしてアドリアノープル（ハドリアノポリス。現在のエディルネ）を襲い、富財を略奪する。

当時のローマ皇帝テオドシウス1世（在位379～395年）が東ゴート族にトラキア地方北部を割譲して略奪を制止した。他方、彼はコンスタンティノープルからアリウス派の司教や司祭を追放し、古代オリンピックを廃止して異端と異教を排除する。テオドシウス1世の代に、アタナシウス派キリスト教がローマの「国教」になる。そしてサーサーン朝ペルシャ同様、ローマも国教＝アタナシウス派キリスト教の下で慣習法＝ローマ法を統合し、国教会＝アタナシウス派キリスト教会が裁判を担うようになる。その後聖職者数が増大し、アタナシウス派キリスト教会は統治機構化した（コラム10）。

アタナシウス派キリスト教会（以後、たんに「キリスト教会」と呼ぶ）は多量のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換も仲介した。異なる財貨の交換が異なる物品貨幣の交換を容易にし、他方、財貨を保有する貴族等が財産を求め土地売買や奴隷売買に関与するようになる。4世紀後半から、ローマの荘園数が増大しはじめる。

12世紀後半以降、売り手と買い手の関係が非対称化し、商品交換が不等価交換になる。そして「商い」が不可逆な位相構造を形成するが、もしも4世紀後半のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換が同様な不等価交換であったとすれば、貨幣経済と商品経済の基本構造は同じである、と言うしかない。だが、ローマでもペルシャでも、国教会＝統治機構が両替に関与していた。また当時の財貨は商品的側面を有していない。すなわち、当時の財貨は「制度」であり、金銀交換に為替差益は生じない。

したがって前節のコラム8で論じた「貨幣クラス」は商品クラスではない。貨幣経済下では、売り手と買い手の関係は対称で、交換は等価交換に準ずる等比交換になる。

（財産も貨幣クラスのメンバであるが、財貨と同類である。古代帝国では、金貨や銀貨による土地売買はおそらく土地分与の不正を是正する手段であり、奴隷売買はおそらく強制移住の代替手段である。古代帝国では、土地も奴隷も支配者層や官僚機構内でのみ循環する「財」であった。官僚機構と統治機構はちがうし、官僚制度と統治制度もちがう。とはいえ、統治機構は官僚機構の属性を継承し、統治制度は官僚制度の属性を継承する。中世帝国の統治制度が古代官僚制から属性を継承した結果、財貨が土地や奴隷を財産化したとも言える。「広義の近代」の突破期に奴隷が商品化するが、土地から金融商品が派生する場面があっても土地が商品化する場面はない。土地は財産として残り、順序構造＝貨幣経済も残る）

ところで、3世紀の古代ペルシャで、サーサーン朝がアルサケス朝から王位を篡奪し、他方、ローマが三つに分裂したが、古代中国や古代インド、古代メソアメリカや古代アンデスでも同様な「危機」が勃発している（日本でも同様な危機＝倭国大乱が勃発した）。

2世紀後半の古代中国＝後漢で黄巾の乱が勃発し、その後魏・呉・蜀の三国時代がはじまる。2世紀後半から3世紀後半までの約100年で中国の人口が約7分の1に減少した。また3世紀前半の古代インドで北方のアーリア人がサータヴァーハナ朝（アーンドラ朝）を滅ぼし、デカン高原とアラビア海沿岸の南西インドを支配する（古代ローマが交易した「古代インド」はサータヴァーハナ朝であるが、そのサータヴァーハナ朝を建国したのは非アーリア人＝ドラヴィダ人である）。そして4世紀初頭の古代メソアメリカでマヤ文明に大きな変化が生じ、5世紀初頭の古代アンデスでティワナク文明が勃興する（筆者は、スペインの圧政と約300年戦ったマプチェ族の祖先がティワナク文明を築いたと考えるが、本書では中南米やインド、エジプトや中央アフリカの古代文明に言及しない）。

歴史家たちは、西ローマ帝国が減った5世紀後半から大航海時代がはじまる15世紀後半までの人類史を「中世」と呼んでいる。だが、2世紀後半から3世紀後半の世界各地で「グレート・リセット」が生じてい

る（2～3世紀に地球規模の気候変動が生じた。それが「グレート・リセット」の原因かもしれない）。そして4世紀後半に新たなスキームの帝国＝中世帝国が誕生する。

中世帝国の誕生を起点にすれば、中世は4世紀後半からはじまり、八十年戦争が勃発する16世紀後半まで続いたと考えるほうが妥当である。すなわち、中世は定説より約100年早くはじまり、約100年長く続いた。以後、4世紀後半から16世紀後半までの人類史を「広義の中世」と呼ぶ。

サーサーン朝ペルシャはアルダシール1世がアルサケス朝から王位を篡奪したときからはじまるが、中世帝国のスキームを確立したのはシャープール2世（在位309～379年）の代である。他方、ローマが中世帝国化したのはテオドシウス1世の代である。

中国で最初に誕生した中世帝国は北魏である。サーサーン朝ペルシャもローマも中世帝国のスキームを支える国教＝最高法規と国教会＝統治機構、財貨＝統治制度が不可欠であったが、魏普南北朝時代に華北を統一した北魏も同様である。北魏は仏教を国教化し、均田制を実施した。北魏の均田制はローマの軍管区制に相当する。同時代中国の南朝＝宋の国教も仏教であった。北魏の財貨は絹で、宋の財貨は銅貨である。北魏と宋の間で貨幣経済が誕生する。中世帝国と貨幣経済に着目すれば、「広義の中世」の起点を370年前後に置く筆者のレベル4パースペクティヴは妥当である。

筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、「広義の中世」は770年前後に突破期に入る。750年、アブー・アッバースがウマイヤ朝アラブ帝国からカリフの座を篡奪してアッバース朝イスラーム帝国を開国し、金銀複本位制を発明する。可逆な等比交換の制度化＝金銀複本位制は貨幣経済を中世帝国の内外に広げた。そして銀貨＝銀が秤量貨幣化し、財貨＝統治制度から離脱して世界通貨＝世界制度になる。

その後国教会が経済上の役割を喪失し、ユーラシア大陸西部の中世帝国＝ビザンツ帝国とユーラシア大陸東部の中世帝国＝南宋（あるいは北宋期の遼）が新たな統治制度＝封建制を発明する。他方、世界通貨＝銀の下で突厥やウイグルが中央アジアに王国を建国する。金銀複本位制と世界通貨に着目すれば、770～1170年前後を「広義の中世」の突破期と考える筆者のレベル4パースペクティヴも妥当である。

「広義の中世」は1170年前後から成熟期に変遷し、「広義の近代」の出現期が重畳する。すなわち、ユーラシア大陸東西で「世界帝国」が誕生し、貨幣経済に商品経済が重畳して経済空間が位相構造を形成する。神聖ローマ帝国やオスマン帝国、元朝や明朝に着目し、また商品経済に着目すれば、1170年～1570年前後を「広義の中世」の成熟期と考え、「広義の近代」の出現期が重畳すると考える筆者のレベル4パースペクティヴも妥当である。

「広義の近代」は1570年前後に突破期に入る。そして貨幣経済と商品経済に市場経済が重畳して経済空間が代数構造を形成し、資本＝商人資本が誕生する。さらに産業資本と金融資本が誕生して経済空間が肥大しはじめる。その後「広義の近代」は成熟期に変遷し、「広義の現代」の出現期が重畳する。

筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、1970年前後から「広義の近代」の成熟期に重畳して「広義の現代」の出現期がはじまるが、問題は貨幣である。筆者は、「広義の現代」の出現期に貨幣の道具的側面が資本的使用価値から別の何か（たとえば社会的使用価値）に置き換わる、と考える。そして世界通貨制度に刷新が生じる。「第三次世界大戦」が勃発する前に新たな世界通貨制度に移行できるかどうかが人類の大きな課題になっている。

以後、筆者のレベル4パースペクティヴの下で貨幣と商品、市場と資本の変化を論じる。言うまでもないが、筆者のレベル4パースペクティヴは公文氏の三つのパースペクティヴを内包している。

コラム9： 学徒ユリアヌスと皇帝ユリアヌス

ユリアヌスはコンスタンティヌス1世の異母弟ユリウスの次男で、ユリウスを殺害した当時のローマ皇帝コンスタンティウス2世（在位337～361年）に軟禁され、母方の実家（小アジア北西の黒海沿岸都市ビテュニア）で育つ。ニコメディア司教エウセビオスが彼をキリスト教徒として育てた。エウセビオスの死後、コンスタンティウス2世は彼を幽閉するが、約6年後に解放する。自由の身になったユリアヌスはコンスタンティノープルやニコメディアで新プラトン主義やストア哲学を学び、短い期間であったが、アカデミアで古代ギリシャの哲学や自然科学も学ぶ。そして自身を「ギリシャ人」と称するようになる。

355年、ユリアヌスはコンスタンティウス2世に命じられ、ローマの副帝に即位してガリア地方に赴任した。そしてライン川以西の統治と防衛に携わるが、コンスタンティウス2世にとってユリアヌスの副帝即位とガリア地方赴任は血縁者をガリア地方に置きコンスタンティヌス朝の権威を高める、といった程度の目的にすぎなかった。コンスタンティウス2世は自身に臣従する文官や武官にガリア地方の政治と軍事を委ねる。だが、ユリアヌスは自身の意志と信条の下でライン川以西の統治と防衛を遂行する。

学徒ユリアヌスにとって、政治も軍事も「学問の奴隷」である。彼はガリア地方の腐敗を撲滅して華奢を抑制し、減税を実施した。他方、ライン川兩岸各地でゲルマン人（主にアラマンニ族）を撃退する。その後コンスタンティウス2世と帝位を争うが、361年にコンスタンティウス2世が病死し、ローマ皇帝に即位する。

即位後、ユリアヌスはキリスト教会の権益を剥奪し、ローマ全域で腐敗の撲滅と華奢の抑制、減税を実施した。その後ペルシャ遠征に赴き戦死するが、このペルシャ遠征は謎が多い。

コンスタンティウス2世の代に、ローマ軍とサーサーン朝ペルシャ軍の戦闘が多発していた。ユリアヌスのペルシャ遠征はその延長であると論じる歴史家や作家が多い（キリスト教会の権益を剥奪したユリアヌスが、皇帝の権威を確立する上で行った遠征であると論じる歴史家や作家もいる）。

だが、ユリアヌス以前のローマとサーサーン朝ペルシャの戦闘はもっぱらアルメニア王国の支配をめぐる戦闘で、主な戦場はユーフラテス川上流域である。皇帝の権威を確立する上でサーサーン朝ペルシャと戦う必要があったとしても、ユーフラテス川上流域で戦い戦勝すればよい。しかしユリアヌスは軍勢をアンティオキアに集結してペルシャ遠征に赴いている。目的地はサーサーン朝ペルシャの首都クテシフォンである。

ユリアヌスは、自身を「ギリシャ人」と称していた。それを新プラトン主義やストア哲学の影響によるものであると考えるのは単純すぎる。ペルシャ遠征で戦死するまで、ユリアヌスは戦場で敗北したことがない。おそらく、カラカラ同様、ユリアヌスもアレクサンドロス3世を信奉していた。そして、アレクサンドロス3世がアケメネス朝ペルシャを征服したように、彼はサーサーン朝ペルシャを征服するつもりでいた。筆者は、それがペルシャ遠征の理由であると考えられる。

（当時、アンティオキアはキリスト教の中心地で、軍勢を集結したユリアヌスはキリスト教徒たちの反発に苦慮した。したがって歴史家や作家たちは、アンティオキアでのユリアヌスとキリスト教徒たちの関係にばかり着目する。他方、彼らはアンティオキアがセレウコス朝の首都であったという、単純な事実に着目しない。彼らは、もしもユリアヌスが、古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国を再建するつもりでいたとすれば、軍勢を集結する場所はアンティオキアがふさわしい、と考えたことがおそくない）

ところで、キリスト教会はユリアヌスを「背教者」と呼び、今も非難する場合がある。だが、ユリアヌスはキリスト教徒を馬鹿にしたかもしれないが、キリスト教徒を弾圧したわけではない。ユリアヌスはキリスト教会の権益を剥奪し、すべての信仰を平等に扱ったにすぎない。彼はコンスタンティウス2世が追放したアタナシウス派の司教や司祭の帰還を許可してもいる（コンスタンティウス1世もコンスタンティウス2世もアリウス派キリスト教徒であった。その後、本文で述べたように、ヴァレンティニアヌス1世がユリアヌスの政策を継承し、テオドシウス1世がアリウス派の司教や司祭を追放する）。

当時のローマは中世帝国化の初期段階で、皇帝が発行するローマ金貨の信用を支えペルシャ銀貨との交換を可能にする国教会＝統治機構が不可欠であった。ユリアヌスはそれに気づき、ローマ帝国などどうでもよいと思っていたのかもしれない。したがって、彼は古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国の再建を目指したと筆者は考えるが、歴史家や作家たちが言うように、彼がキリスト教会の権益を剥奪しながら皇帝の権威を確立するつもりでいたとすれば、彼はミトラ（ミトラス）教会がキリスト教会の役割を代替すると考えていた可能性がある。

（故辻邦生氏の著書「背教者ユリアヌス（中央公論新社）」は名作である。マルクス・アウレリウス・アントニヌス（五賢帝のひとり）を敬愛していたユリアヌスは、「学問の自由」を主張してキリスト教会と対立した。「学問の自由」はストア哲学の精神と合致する）

ミトラ教会がキリスト教会を代替すると考えていたとすれば、ローマ皇帝ユリアヌスは誠実な学徒であり、賢帝であった言うしかない。とはいえ、ユリアヌスが長く皇帝を続け、ローマの国教がミトラ教になっていたとしても、後の人類史が大きくちがったとは思えない。重視すべきことは、キリスト教やミトラ教ではなく、国教と国教会である。

商品経済が進展した場面で、国教も国教会も法的役割と経済的役割を喪失するが、他方、国教や国教会を復元しようとする復古的な運動や反乱が多発する。復古的な運動や反乱は過去に逆行して新たな法や統治機構を構築する試みでもある。日本の幕末に勃発した倒幕運動がそうであった。あるいは、2・26事件もそうであったかもしれない。現在のイスラーム教原理主義やキリスト教原理主義もそうである。

民主主義や社会主義も原理主義化する場合がある。社会の不幸から原理主義が生じるとしても、原理主義が実現した後の社会により大きな不幸が訪れる。筆者には、イラクのフセイン政権やリビアのカダフィ政権の打倒が正しい行為であったとは思えない。日本政府は、それらを「他山の石」として、北朝鮮等に対処すべきである。

コラム10： アレクサンドリアの悲劇

キリスト教会は新プラトン主義やグノーシス主義も「異教」と判断した。ローマ皇帝テオドシウス1世は、「異教徒の祭典」であるとの理由で古代オリンピックを廃止する。その後キリスト教会の異教弾圧＝哲学弾圧はエジプトのアレクサンドリアに波及する。

391年、テオドシウス1世はアレクサンドリアのキリスト教会に異教の神殿や施設を破壊する許可を与える。そして415年、キリスト教徒たちはアレクサンドリア博物館やアレクサンドリア図書館を襲撃し、アカデメイア・アレクサンドリア分校の校長を務めていたヒュパティアを惨殺した。

ヒュパティアは新プラトン主義の哲学者で、マリー・キュリーに匹敵する女性科学者であつたらしい。彼女はアストロラーベ＝天体観測儀やハイドロスコープを発明したと言われている（レイチェル・ワイズが主演した映画「アレクサンドリア」を観賞すれば、ヒュパティアの人物像や言行等がよくわかる。ちなみに、当時のアレクサンドリア教会総主教キュリロスがキリスト教徒たちを扇動した。しかしキュリロスは、後に聖人に列せられ、キリスト教徒たちは今も彼を拝んでいる）。

とはいえ、アレクサンドリアのキリスト教徒たちが暴徒化した原因はキリスト教そのものにあるわけではない。原因はキリスト教が国教化したことにある。サーサーン朝ペルシャでも、国教化したゾロアスター教が暴走している。たとえば、祭司長のキルデルが多数のキリスト教徒やユダヤ教徒、仏教徒やマニ教徒を殺害している。

アルサケス朝ペルシャ王は、おそらくサーサーン朝ペルシャ王よりゾロアスター教に深く帰依していたと思えるが、アルサケス朝ペルシャが異教徒を弾圧した記録はない。中世化する帝国が、帝国の法＝慣習法体系を支える国教と財貨を支える国教会を発明し、国教会＝統治機構が国教＝最高法規の下で司祭や信徒の暴力を容認した。

しかし、同時代の中国＝魏普南北朝時代の中国でも仏教が国教化し、北朝と南朝の間で貨幣経済が誕生したが、中国の仏教徒が暴徒化する場面はない。中国の国教は仏教であったが、儒教や道教も国教であった。すなわち、中国では国教が一元していない（したがって慣習法の統合も不徹底である）。

中国の中世帝国は、概ね遊牧民の征服王朝である。したがって帝国の支配体制が農耕民支配と遊牧民支配が混在する体制になる。中国が国教を一元できなかったのはそのためである。帝国の両面性、あるいは両義性を束ねる唯一の存在が皇帝であった。

国教の儒教一元を試みる皇帝もいたが、成功していない。たとえば、北魏は太武帝の代に宰相の崔浩が提言して廃仏を断行した。だが太武帝の死後、仏教が復興して国教化する。仏教復興の中心人物であった曇曜は「皇帝即如来」を唱えた。また同時代の南朝では、梁の武帝が「皇帝菩薩」などと呼ばれたりしている。「皇帝即如来」も「皇帝菩薩」も滑稽と言うしかないが、信仰が国教化すると暴力だけでなくそのような滑稽も信心になる。

中国では、北宋期に遼＝契丹が身分制あるいは封建制を発明し、農耕民支配と遊牧民支配がようやく一体化する。そして南宋期に儒教と道教、仏教が一体化し、ようやく国教が一元化する。

とはいえ、この「遅れ」は後進性を意味しない。北宋期や南宋期の中国の鉱工業生産量はヨーロッパやイスラーム圏を凌駕していた。農産物の生産量もヨーロッパやイスラーム圏を凌駕していた。識字率も中国のほうが高かったと思う。